

中、展望の開けた山頂で銃の紋章を削り、最後に実弾一発を大空に向け撃つ。続けて手榴弾を爆破し、思わず手を合わせる。誰言うもなく黙禱し山を下った。

高い鉄条網に囲まれた収容所が見えてきた。衛兵がガムを噛みながら一兵一兵を鋭く観察する前を、銃殺覚悟で通り過ぎた。米国旗の下に横一列になり、次々に武装を解かれ無防備になった。奪われた銃剣が投げられてガチャガチャ積み重ねられる音を空しく聞きながら相手のなすままの虜囚の一日が始まった。

頭上の星条旗が凜然とはためき、茜の夕空に映えていた、その風景で「俺の命は救われた。戦争は終わった。国は敗れ捕虜となった」等々で千々に心が乱れた。優越感を無くし、失意の足取りで、監視兵の誘導のまま、収容所で生活する抑留の毎日が始まった。

日本の軍隊は命令のまま、死地に向かうべく訓

練され、上官の命令を至上とし、また負傷しても、食糧がなくても、餓死寸前でも、誰一人として降伏することを考えなかった。ひたすら戦い、斬り込みに志願、また発狂人も自殺者も出た。

戦争は悲惨である。とくに弱者にとつて。この平和な時代が永遠に続くよう祈って話を終わります。

中支と大島防衛 再度のご奉公

神奈川県 安藤 要

私は、大正八（一九一九）年、厚木市戸室に生まれ、昭和十四（一九三九）年十二月、甲府第四一九連隊第九中隊入隊しました。直ちに同年十二月二十三日、北支派遣により二十九日塘沽港上陸、河南省陽武にて初年兵教育を受けました。以降、冀南討伐作戦等に参加しました。

昭和十六年、共産軍殲滅作戦、中原会戦、等に
参加しまして、同年十二月、黄河左岸地区戦に参
加後、霸王城の警備に任じました。昭和十八年八
月、包頭付近警備より二十一日下関に上陸して補
充隊に到着、ここで除隊となりました。

さらに昭和十九年八月、東部第六部隊に臨時召
集されまして、磯第一四二〇六部隊に編入されま
して、その編成完結後、伊豆大島に上陸いたしま
して、磯第二七七二二部隊三好隊に転属して、八
月まで大島防衛に従事致しました。

そして同年十月四日、軍令陸甲第一一六号によ
り召集解除となり復員致しました。

以上が私の軍歴の概要ですが、なにしろ六〇年
も前のことで、頭の中に残っているものも少な
く、ほとんど消えております。幸いにして当時の
軍隊の生活の重要なところは軍隊手帳に記したも
のを持って帰っておりますので、戦闘の参加期日
などについては確実です。それで、それを基に、

中国戦線での思い出をお話したいと思います。

私は、昭和十四年十月十日に徴兵検査により乙
種合格となりました。乙種合格は兵隊に行かなく
てもよいという話ほとんどない話でして、すぐ
に入隊の命令がきました。そして戸室の神社を出
発、部落の大勢の方の見送りを受けて出発しまし
た。駅に到着して、これが故郷の見納めであると
覚悟はしました。

我々は少年時代から戦争に行くということを教
えこまれていきますから、戦争というものは、さほ
ど恐いと思わなかったし、心配もあまりありませ
んでした。しかし、その後、これが最後かという
ことは何回も経験しました。

まず甲府の第一四九連隊に入隊しまして、その
時に迎えに出た上官を見ますと、内地で勤務して
いる上官よりも服装が違ふ訳です。これは戦地か
ら私たちを迎えにきた先輩の上官でした。召集兵
の方で、出身は神奈川県の中郡の方でした。

入営して約十五日間の内務班の教育がありました。その教育はさほど厳しくはなかったのですが、甲府にある昇仙峡に夜間行軍で二回連れて行かれました。そして当初、三八式歩兵銃、帯剣などが渡され、その教育が三日連続でありました。

その教育というのは、鉄砲の分解・整備です。扱いは、中にスプリングなどが入っているのをドライバーを用いたりするのですが、これらの工具には軍隊用語というのがありまして、スプリング、ドライバーは敵性語であるといって使用できない、それでそれぞれ「発条」「螺廻し」だという風に教育をされました。

内務班の班付上等兵というのがいまして、その班付上等兵というのは成績が悪くて内地へ帰された兵隊でした。だから物凄く厳しいのです。こちらはそのこと分かりませんが、そういう人たちが朝から青竹を持ってきている。そのような厳しい十三日間の班内生活の中で頭に残っているのは搔っ払いが多いことです。夕刻に入浴に行くので

すが、私の隣に寝ていた人も、二日目の晩に編上靴を盗まれてしまった。代わりがないかという、自分の足に合わない靴が残っている。それを上官に話しますと、次の日にどこからか貰ってきたと、こういう泥棒のやり取りです。こういう生活が甲府に入隊した十三日間でした。

いよいよ戦地から迎えにきている上官である曹長の指揮により行動開始となったのですが、十二月二十三日に北支派遣部隊へ転属となり、芝浦港に向かいました。いよいよこれで日本とは最後になるということで乗船しようとしたのですが、芝浦の近所の国防婦人会の人々が、荒縄を二本ずつ渡してくれるのです。「これは何に使うのか」と婦人の方に聞きますと、乗下船の場合に足が滑る危険があるために支給しているのだということでした。

乗船しますと、一番底に軍馬がいっぱい載っていて、その臭いが上へ舞い上がってくる。我々は

その途中の階で生活するのです。予定としては五日間ということでしたが、不幸にして玄界灘が非常に荒れて六日間掛かりました。船酔いによって食事も食べられない。船の中でやる予定だった予防注射もできない。人も船も揺れて注射もできないということでした。ある港に寄って注射をやったという状況でした。一週間掛って塘沽港に到着しました。

塘沽港では上陸するために小さい船に乗替えて上陸します。船頭は中国人でした。初めて見た中国人ということに非常に恐れ、「こいつらか」という気もしましたが、おとなしい人のようでした。上陸すると、それまでの船酔いは数時間で治ってしまいます。腹も減って食事もできます。全員が上陸、元気になりました。

塘沽から貨物列車の鉄道に乗り目的の河南省陽武というところへ向かったのですが、驚いたのは、その貨物列車の前の方に砂利を満載した貨車

を着けて走っているのです。初めは判らなかつたのですが、途中で聞きますと、その地域は、我々の先輩の第一四師団の人たちが宣撫工作をやって平穏な地域になって入るのですが、今だに共産軍や蔣政府軍の密偵がいて、住民の服装をして情報を探りに来るし、鉄道の爆破もやるということでした。

鉄道の爆破というのは簡単で、爆薬を枕木の下に入れて爆破すればいいので、そういう事故が多発しており、その事故を直すために、そういう貨車を着けて走っているということでした。

それで目的地に着き、初年兵の教育が始まった訳です。予想はしていたのですが、この教育もまた凄い教育でした。教育の内容の第一は、覚えなくてはならないということです。「軍人に賜った勅語」「五箇条の御誓文」などで、便所でも暗記をするという状況で、頭の悪い人も良い人もいますが、絶対覚えなくてはならないということでした。そして初年兵でも夜間は兵舎を守らなくては

ならないので、夜間の不寝番を三人ずつ三交替でやりました。

山には木も植わっていないような所ですが、こんな所で夜間、歩哨に立って、星を見て思い出すのは、やはり母親や兄弟のことで、仲間には涙を流したと言っていた者もありました。

六カ月の教育の間、同年兵にはいろんな人がおりました。博打ちもいるし沖の仲仕の人もいますが、これらの人とはすべて同列で、中で一人でも悪いことをすると全体責任として十三人全員が殴られる。それで気をつけないといかんということは、いつも心の中にあつた訳です。ところが十三人の内務班の中で、班付上等兵が一人、班長が一人います。私の班の班長は、山形の魚屋さんで召集兵で、班付は一年先輩の上等兵、この二人が班についています。その二人の内一人は非常に育ちが良く温厚な方でしたが、ほかの一人、原田という上等兵は、地見屋をしていた人でした。

殴るのはいいのですが、本人は笑いながらの教育をして、つい釣られて笑ったこともあるのですが、するとピンタが飛んで来る。酷い時には銃付軍靴をスリッパにしたもので殴る。だから軍隊へ入るのだから歯を治しておかなくてはと治して軍隊に入つて来た人も、ピンタで歯が飛び出したこともあると聞いていました。しかし初年兵の同年兵というのは、兄弟以上の関係で、今でも一部の方とはお付き合いをしています。

六月一日に教育が終了して階級が一つ上がり、陸軍一等兵を命ぜられました。六月四日には、早速、冀南討伐作戦というのに初めて連れて行かれました。これは後で考えてみると、初めての作戦なので、比較的大丈夫であるということから初年兵も出動させたようで、犠牲者は出ませんでした。

その作戦から無事帰り、七月十日、中隊本部全部が出た作戦に参加しましたが、その時には同年

兵からも犠牲者が出ました。この原武県に八日間勤務して、八月八日警備地が変更になり陽陰という所の警備に着きました。

私は河南省に大体いたのですが、中国というのはどこも同様だと思うのですが、街や部落は全部城壁で囲まれており、東西南北の四つの門以外は出入りできない。そこへ日本の兵隊と中国の自警団の双方の二人が立哨することになっています。

ところが我々は現役兵であって階級は下であるために、中国の密偵が情報収集のために入ってくる、そのために一つの門が襲撃を受け、立哨している日本兵が死亡している。

その当時、第一四師団がいた所へ、我々がいつて交替したのですから、子供の兵隊といって馬鹿にされたということです。そういう勤務を終えて十二月八日、連隊本部の要員として転属させられました。本部では他の部隊の幹部との行き来の多い所で、しかも、ここには軍旗が保管してあって、そこには常に兵隊が二十四時間立哨してい

る。夜間は非常に冷え込んで、毛皮の付いた長靴、毛皮の外套、これを着るとムクムクして、とても苦しい。ところがしばらくすると体中が痒くなつて来る。何かというとならぬのです。それでこれはそのまま着られない、完全に煮沸しなければならぬ。痒いから搔いても搔いても痒いのです。連隊本部では、そんな生活をしました。そして各中隊からは擱まえた捕虜が送られてくる。将校が調べて白状させる、まあ強要です。

連隊本部の勤務を終了して、十二月二十三日、共産軍討伐作戦に従事しました。これには部隊が、火を付ける、女・子供を集める、食料を確保する、の三つの任務を分担しました。

昭和十六年四月十日、共産軍の殲滅作戦に参加しました。この時に指揮官が代わりまして、山下少尉となったのですが、この少尉はキリスト教の牧師さんで、撃ち合いになると「撃つてもいいから、当たらないように撃て」というのです。吃驚

したのですが、当たらないように撃てば、こちらが当たる訳で撃たざるを得ないので。そういう方もいたのですね。

そのほか宣撫工作も盛んにやっているのですけれども、日本の兵隊でも悪いこともするので。物を買う時物を先に取って金を払わない。そんなことをするものですから、買った西瓜に薬物の注射がしてあり、食べた者は下痢になったということもありました。また鉄道警備の時、駅前の人力車に乗って、金を払わないで宮門に入ってしまった。人力車がストライキを起こしたこともありました。

昭和十六年五月十日、中原会戦という大きな作戦がありました。これに参加して連日の行軍が続きました。どのくらい歩いたか判りませんが、毎日毎日夜歩くのです。ある夜、撃ち合いとなり、よく確認したら隣を並行して歩いていた味方だったという一幕もありました。また、生水を飲むこ

とは禁止されていましたが、それでも飲んで、下痢になる者が多く、私も下痢で陸軍病院へ入れということになりました。入ったら腸チフスじゃない、マラリアだろうという。その陸軍病院は大きな病院で、従軍の看護婦も沢山いました。そして私たちは伝染病ですから、内地から慰問団が来ても、皆と一緒に参加できない。いわゆる差別されていました。腸チフスは治つてくると非常に腹が減ってくる。食事を貰いに行くには、茶碗を一つ懐に隠して、余分に一つもらって来る。そんなことで退院が一週間遅くなりました。

昭和十六年五月十七日に退院して、本部に帰り白雲口という現地戦に参加しました。その後、十七日以降は黄河の左岸地区の戦闘に参加しました。黄河というのは泥川で、川へ入って立つと、禪が黄色になる。私たちのいた所は堤防がなく、波が打つと土手が崩れてくる。

十二月三十日、警備地がまた変更となり、黄河

の上流の霸王城の陣地戦に参加しましたが、その途中に墓標が沢山立っていました。その中に私の従兄弟の名前が書いた墓標があつて吃驚しました。写真をとることもできないし、水筒の水を掛けて拜んで目的地まで行きました。着いて驚いたのは、そこは全部陣地が穴ぐらでした。大きな穴ぐらには中隊本部が、その前に各分隊の陣地があります。

ここは、将来、重慶へ向かつての黄河の橋梁を確保するための陣地でした。大体背の高さぐらいに掘つてあり、トーチカが所々にある。谷の向この敵側も同じような陣地で、昼間は非常に静かですが、夕方太陽が西に傾くと撃ち合いが始まる。距離としては非常に近く、向こうの話が聞こえるぐらい、そして夜間は銃身が真っ赤に見えるほど撃つ。それで毎日彙きょうの整理に兵隊が出て集めている。

夕方撃つてくる時刻になつて、「こちらでレコードを掛けるから、お前たち静かにしろ」と呼

びかけると、ピタつと射撃を止める。そして「日本に降伏して来い。いまの内にこちらへ来なさい」と呼びかけます。

銃弾の撃ち合いでは弾は横から来るので恐くないのですが、上から落ちてくる迫撃弾は恐い。しかし耳を傾けていると音が凄いから逃げれば良いので、比較的対応しやすい。陣地の前には三三〇〇ボルトの電気を流した電線がある。これにうっかり銃をひつ掛けた兵隊もいるのです。

このように対峙していても情報が全く掴めないで、向こう側にいる中国軍を捕虜として情報を探るために拳銃、帯剣、地下足袋で、谷を降りて行きましたが、発見され、全員八人が撃たれ亡くなつております。この行動は、部隊本部の命令でなく行なつたため、報告して本部より叱られたと聞いております。

いま一つ驚いたのは、私たちの陣地から、食料輸送などで行く黄河の橋の側に糧秣倉庫があつ

て、私もそこへ命令受領に行ったのですが、砲兵隊が駐屯しており、その歩哨が、厚木の戸室の一級上の私の友人だったのです。「久しぶりだなあ」と話をしたいのですが、公務中で、目で合図しただけで別れました。終戦後お会いして、懐旧の話をしました。

昭和十八年二月十一日、警備地変更により、私は北京を経由して蒙古の包頭の警備隊に赴任しました。この包頭へはソ連戦に供えての移動で、この部隊は高射砲部隊でした。しかし飛行機を撃つのでなく、高射砲で零距离の水平射撃で戦車を撃つというものでした。そして新設部隊ですから、私のように成績の良くない人間の集りです。召集兵もおりました。そして対ソ戦の高射砲の訓練も終わつたのです。

そして昭和十八年八月、包頭付近警備より二十一日下関に上陸して補充隊に到着、ここで除隊となりました。